



2021シーズン最終節トークイベントでの本吉佑多さん



MF10 梁 勇基



2022シーズンホーム開幕戦のスタジアム



MF17 富田晋伍

ーヤマ株式会社に就職し、彼なりのかたちでチームに関わり、支えている。こうした人たちは、楽しいときでも苦しいときでも、憧れたあの場所に関わりたい夢を、それぞれのかたちで叶えている。

そしてその誰かがまた、その先の誰かの憧れとなる。遠藤は新しい世代の子供たちに、憧れの舞台を感じ取ってもらえるようにと、ユアテックススタジアム仙台に「YASUSHI」を設立した。

チーム在籍18年目の富田晋伍は、J2時代の2005年にユアテックススタジアム仙台でプロデビューし、昇格も降格も経験して今に至る。本誌のインタビューにあたり、在籍最長選手となった今だからこそ気付いたような、当時の心境などを話してくれた。そして、2004年から2019年までホーム側で、2020年から2季はアウェイ側でこのスタジアムに入場した梁勇基がこの街に帰ってきた。練習生からスタートし、いつしか中心選手となり多くの者の憧れとなってきた彼は、この場所で「もう一回仙台の選手が戦っている姿を見たい」と思っていただけの戦いを見せたい」と意気込んでいる。

J2になっても、ここは誰かの憧れの場所だ。以前のJ2と同じくらいに熱が下がってしまったのではなく、今また違うタイプの熱が感じられるJ2を戦う場所として、ユアテックススタジ



Jリーグ登録フリーランスライター

板垣晴朗

●いたがき せいろう

長く仙台の取材を続け、現場での取材を重視する。海外事情にも詳しく、選手やスタッフからの信頼も厚い。2021年にELGOLAZO BOOKSより雪後 天名義で大衆娯楽喜劇小説「ラストプレー」を上梓。

アム仙台はこの街に存在する。そして、いち早くJ1に戻り、以前よりさらに輝きを放つ存在になろうという志とともに、今季のベガルタ仙台はJ2リーグ戦に臨む。

簡単な戦いではないことは、チームに関わる人間ならわかっている。だが苦しさだけを意識しては、自らの首を絞めてしまう。2021年の残留争いにおいて、重圧下でのびのびと力を発揮することができなかったように。

どんなに厳しくとも、不慮の出来事があったとしても、このチームと感情をともにする人たちは、楽しみ、憧れる気持ちを忘れないでほしい。そして、憧れの場所を、またJ1に持つていく。

2022シーズンが、楽しみとともに始まる。